# 見えないものに目を注ぐ

「コリント人への第二の手紙」4 章 16～18 節を朗読。

18 節「**わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである**」。

見えるものだとか、見えないもの、これはいったい何の事を言っているのだろうかと思われますが、見えるもの、これはすなわち、五感を通して理解する、受けとめる事態、事柄、その様々なものを指して、「見えるもの」と言われています。というのは、私たちの日々の生活にはいろいろと事が起ってきます。生きることはそういう事だと思います。その出会う一つ一つの事柄を、自分の力で解決し、自分の判断で事を決め、自分の経験に基づいて生活を整えていこうとする。判断や決断をつける時、見えるものを根拠にしています。見えるところに従っている。自分の能力だとか、力だとか、人間関係、社会の仕組み、いろいろなものを利用して、今日の一日を上手く生き抜いていこうとする。これが、私たちが普段している事です。常に見えるもの、確実なもの、理解できる、納得できることによって、生きようとする。これが見えるものによると言うことに他なりません。考えてみると、いろいろな事について、自分の思い描ける範囲、自分の理解しうる範囲で生活しています。だから、自分のわからないことについては、不安を覚えます。また、わかることについては安心を得ます。そういう見える状態、事柄に振り回されることが、日々、悩みとなるのです。自分の願ったようにいかない、思ったようにいかない、なんだか訳のわからない事態や事柄が起ると、いったいどうなったのかと不安になり、いろいろな原因を探りますが、わからない。殊に、今日一日の事、今、目の前の事について、不満はあるけれども、納得いかないことがあるが、とりあえず今はこの状態であるから、仕方がないと、諦めるような思いになります。ところが、明日はどうしようか、あるいは一か月後、一年後にはどうしようか。そういう見えないところになると、不安になります。自分の手が届かない、自分の思いや考えが及ばないような局面、場面に出会う時、不安や恐れ、思い煩いの中に落ちこんでいきます。しかし、私たちは神様によって造られた被造物でしかないのです。ですから、今こうやって生きている今の瞬間は手応えがある。自分なりに安心を得る。しかし、一つ前、もう少し先の事、今日の午後の事、あるいは明日の事を考え始めると、確信はだんだんと減っていきます。自分の確信が持てる世界が消えていくのです。そして、わからない事、見えない事に不安を覚えます。そういう中にあって、すべてを造り、生かし、そして今も全能の力をもって、万物をご自身のみこころのままに支配して下さる神様のいますことを信じよと、聖書は語ります。私たちも聖書の言葉を信じて、イエス・キリストの救いに入れられ、神様と共に生きる者とされたのです。イエス様が言われるよ

うに、神の御子、イエス様は世に降り、私たちの罪の贖いをなし遂げて下さいました。その主は、今も生きておられる。と言って、どこに生きておられるのか。目には見えないのです。よみがえって、世の終りまでいつもあなたがたと共におると約束して下さった。じゃあ、イエス様はどこにいらっしゃるのか。見えない。人は見えるものに心をゆだねる。思いをそこに向ける。そういう習癖と言いますか、性格です。ですから、「見えないもの」、言い換えますと、自分には理解できない、目で見ることも、手で触ることも、耳で聞くこともできない。ましては、食べることも、味わうこともできない。そういう見えないものの中に置かれると、人は立ちどころに、不安と心配、思い煩いの中に落ちこんでしまう。時には、憤りを感じる。どうして。何で私はこんな目に遭わなければいけないとつぶやく。それに対して、聖書は大切な事として、造り主を覚えよと言われる。神のいますことを信じる。神様は森羅万象、ありとあらゆるものをお造りになったと語られています。そして創造の最終段階に人を造って下さった。私たちは神様に造られた存在、被造物であること。ですから、被造物である私たちは、同時に創造者、造り主を覚えることが、当然求められるのです。一人一人を造ってくださった神様のいますことを信じる。これは当然のことです。神様が私たちをこの世に送り出して下さった。それぞれ皆さんを母の胎に命を与えて下さった。そして、定められた日月を過ぎて、この世にオギャーと生れるのです。生れた時から神様のことがわかるかと言うと、それはわからない。被造物でありますから。やがて成長していくにつれて、自我に目覚め、自分の判断や力、経験や知識をもって生きようとします。しかし、現実の人生は平たんではない。いろいろな問題や事が起ってくる。そこで何とか安心を得ようと、ああもし、こうもし、自分が納得する道、自分が考えられる道、見えるものに心はしっかりと握られてしまう。ですから一つ読んでおきましょう。

**「ヨハネによる福音書」20 章 24～29 節**を朗読。

イエス様の弟子であったトマスの記事です。イエス様がよみがえられた夕暮れ、弟子たちがユダヤ人を恐れて、一つ所に集まり、戸を閉ざしていました。そこへイエス様が来て下さる。「安かれ」と、「心配するな、安心しなさい」と声を掛けて下さった。そしてわたしはよみがえったと、手の傷を見せ、胸のやりの傷を見せ、弟子たちにご自身を現わして下さった。彼らには信じがたい出来事です。その日の朝早く、仲間の者が墓に行ったところ、イエス様のお墓は空っぽ。その体すらもなかった。イエス様がよみがえるなんて、到底信じがたいことです。ところが、彼らが戸を閉めて潜んでいる場所に、イエス様は来て、「安心しなさい。見てごらんなさい。わたしはこうやって今も生きているではないか」と言われる。まさに見て信じる。言うならば、見えるものによって立とうとすることです。イエス様は彼らの弱さを知っていますから、あえて

彼らが肉体の目で見えるかたちでよみがえって下さいました。それで弟子たちは喜んだのです。イエス様はよみがえって下さった。これまでそうであったように、これからもイエス様は一緒に生きるのだ。そう思ったに違いない。それから 40 日間にわたって、イエス様はご自身がよみがえられたことを証しなさいました。ついに彼らの目の前から天に帰って行かれることになります。イエス様がよみがえられたことを証しなさった時、そこにトマスはいなかった。何かの都合で留守をしていたのです。彼が帰ってきた時、皆がイエス様にお会いしたこと、イエス様はよみがえって、今も生きていると話を聞くのです。その時、彼は悔しい思いもあります。25 節に「**ほかの弟子たちが、彼に『わたしたちは主にお目にかかった』と言うと、トマスは彼らに言った、『わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない』。**」皆が「イエス様はいきていらっしゃる、イエス様に私たちはお会いした、この目で見たよ」と言われたら、トマスとしては無念でならない。「じゃあ、ちゃんとイエス様に触れたのか。触ったのか」。「お目にかかったのは確かであるが、触ってはいない」。トマスは、「**わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ**」なければ、信じないと。見るだけでは終わらない。ちゃんと自分の指で釘あとの傷に触ってみたい。そこに触らなければ信じないと。その後、「八日ののち」と 26 節にありますが、それから一週間ほど経って、イエス様は再び弟子たちに現れて下さった。その時にトマスに対して、「**あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れて、やりで撃たれた傷のあとを触りなさい**」と言われた。信じられない彼に対して、彼を信じる者にしてあげましょう。わざわざトマスに対して「指をのばして、わたしの傷に触ってごらん。胸の傷に触ってごらんなさい。わたしだよ」。その時、トマスは触るどころではない。「**わが主よ、わが神よ**」と。まことにイエス様が今ここにいらっしゃることを否定できない。確かな事として信じるしかない。それに対して、イエス様は、29 節「**あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである**」と言われる。トマスはイエス様がよみがえって下さったと、直接見たから信じた。確かにそうであったに違いありません。しかし、イエス様がおっしゃるのは、確かに見て信じることも幸いだが、何よりも幸いなのは、見ないで信じることである。何を信じるのか。見えないもの、よみがえって下さったイエス様を信じること。言い換ますと、イエス様は同時に神様でいらっしゃいますから、私たちの目に見えない、造り主でいらっしゃる神様を見ないで信じる。これが私たちにとって、幸いな事です。もう一度、初めに戻りましょう。

**「コリント人への第二の手紙」4 章 18 節、「わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ**」。見えないものと言われると、いくらでもたくさん

あります。ここで言われている見えないものとは、はっきりとした、ある特定のことを指しています。それは私たちの目に見ることのできない、聖霊なる神、御霊です。あるいは、よみがえったイエス様も然りでしょう。子なるキリスト、父なる神、また聖霊なる神、三位一体の神は、私たちの目で見ることも、触ることもできません。神様が私たちに求めておられるのは、見えないものである神様にたえず目を注いでほしい。見えるもの、私たちの五感で理解でき、私たちが納得できる世界というものは、一時的な事柄。もうまもなく消え去っていく。終りになる。しかし、造り主であり、全能者でいらっしゃる万物の創造者なる神様は、過去現在未来、永劫にわたって、決して失われることのない、変わることのない方です。その方をたえず見ていく。神様のいますことをたえず信じていくことです。

ここ数年、コロナの問題で心休まる時なく、今に至っています。つい病気になりますと、何が原因だろうか、ああなるだろうか、こうなるだろうか、もし感染したら、どうなるだろうか。後遺症が残るだろうか。あるいは、重篤になって、大変な目に遭うのではないか。いろいろな情報を知ります。それらは見えるものです。ここで言う見えるものに私たちが囚われている時、それが不安であり、心配です。しかし、今こうやって、世界中に願わしくない病が流行っている事の背後にある、見えないものに目を注ぐことです。この今の事態も、神様の許しなしには起こらない。神様がどういう思いで、今この事を起しておられるのか、私たちは知ることはできません。しかし、たとえ私たちにはわからなくても、神様はわかっておられる。神様の手の中で今この事態が起こっているのだと認めていくこと。これが見えないものに目を注ぐという生き方です。それは私たちの日常生活、普段の生活の中でも、常に出会うことでしょう。家族のうちに困った問題が起る。悩み事が起ってくる。経済的な問題、人間関係の問題、教育の問題、しつけの問題、いろいろな事で家庭の中にトラブルが起る。そうすると、常に犯人探し。どうしてこうなったと問います。結局わからないことの方が多いのです。そうなると、とりあえずは目の前の家族に八つ当たりする。そういう話になります。あるいは、その辺の何かを蹴散らして、うっぷん晴らしをして、どうして自分はこんな目に遭わなければならない、となる。そういう見えるものによらない。見えるものの背後に、見えないものを見ていく。これが私たちに求められている信仰です。ですから、日々の生活の中で、自分の計画にない、思いもしない、突発的な出来事が起ってきます。その時こそ、もう一度、心を静めて、その事に囚われないで、その目の前の出来事や見えている事柄によって事を判断するのではなく、見えないものに心を向ける。今このような事態を起しておられるあなたは何を私に求めておられるでしょうか。「神様、私にはわからないけれども、今、このような思いがけない事態の中に置かれている私に、あなたは何をご計画しておられるのでしょうか」。常に見えないものに目を向けて

いく。これがどんな事にもあっても大切な事です。

ヨシュアがイスラエルの民を率いて、ヨルダン川を渡りました。そしていくつかの町を占領していく。彼らの勢いに、周囲の様々な豪族、そこに先に住んでいた人たちが恐れをなします。そういう中で、ギベオンの人たちはイスラエルの民が自分たちを滅ぼすに違いない。そこで策略を練って、「自分たちははるか遠い所から来た者であって、あなたに対して何も害を与えるものではない。だから、和平条約を結びましょう」と言ってくるのです。しかもその時に古びた衣服、崩れかけたようなくつを見せ、固くなって、ボロボロ崩れるようなパンを見せ、ぶどう酒を入れていた皮袋はあちこち繕っているような古びたものを見せ、「出てくるときは新品でした、なのに旅を続けてきた時には、こんな状態になるほどに、私たちははるか遠くから来ました」と言う。そこでヨシュアはどうしたでしょうか。民の長老たちが集まり、彼らの持ってきたパンを食べ、そして彼らの着衣を見、足を見、目の前のものをよく見て、彼らと共に食事を食べて、そして、そんなに遠くから来たのであれば、お前たちの言う通りに違いないと。だったら、不可侵条約、お互いに争わない約束をしよう。そこで平和条約を結ぶ。ところが、彼らは自分たちのすぐ近くに住んでいる民であると分かる。イスラエルの民は騙されたのです。その時、大きな失敗をしました。その原因は、ヨシュア、および長老たちが見えるものに頼ったのです。彼らが言うところのパンを食べ、ぶどう酒の袋を見、破れたくつを見、擦り切れた服をつぶさに調べて、自分の判断によったのです。彼らは見えるものによったのです。これが致命傷です。「**主のさしずを求めようとしなかった**」とあります。見えないものに目を注ぐ。言い換えると、この事を握っておられる、支配しておられる、導いておられる神様は、何をしようとしているのか、何を求めていらっしゃるのか、そのみこころは何であるのか、これを知ろうとすることが大切です。

コロナのような、訳のわからない事態、いつまで続くかもわからない不安の中に置かれます。この時こそ、すべての事を導きたもう神様のいますことをまず信じること、そして神様は何か深いご計画、み思いをもって、今この事を起しておられる。その理由はよくわかりません。私たちは神様のみこころをことごとく知りつくすことはできません。しかし、はっきりしていることは、今、この事態も神様が起しておられる。私たちの周囲に起ってくるいろいろな事がすべて神様の業です。ロシアとウクライナの戦争が始まりました。すでに半年以上続いています。これからいつまで続くかわかりません。ロシアが身勝手な事をした。国を取られてウクライナがかわいそうだ。神様がおられるなら、どうしてあんなことをするのかと憤慨したり、裁いたりします。私たちが当事者であるロシアがいいとか、ウクライナがかわいそうだとか、良かったとか、悪かったとか、そこに囚われる限り、見えるものに支配されてしまいま

す。その先の見えないところに、神様がいます。その事を支配し進めておられる神様の手があることを、私たちは忘れてはならない。それはそんな国際問題をあげつらうことはないかもしれません。もっと身近な、生活の中で起こってくる一つ一つの事柄もまた、人の手で触り、目で見、味わうことができ、耳で聞くことのできること、目に見えるものではなく、そこにも神様のご計画があり、私たちに注いで下さる深い愛のみ思いがあることを知っておきたいと思います。見えないもの、まさに父なる神、子なる神、聖霊なる神、ご自身が、今も私たちの日々の歩みの一つ一つを備えて導いて下さる。自分で決めているように思いますが、自分で判断し、自分でここまでやってきたように思いますが、決してそうではないのです。これまでのことも、どれ一つとって神様によらないものは何ひとつない。だから、「イザヤ書」に、「**目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ**」(40：26)とおっしゃいます。見えないものに目を注ぎなさいと。あなたはいったい何を見ているのですか。あの人を見、この人を見、この状態を見、この事柄を見、そこには私たちの慰めになるものは何もありません。力になるものはないのです。見える事態や事柄を越えて、神様のご愛のみこころがある。自分たちの手で何とかしよう。あの人に頼み、この人に頼み、こうしたらいいだろうか。それでは事は終りません。どんな問題の中に置かれようとも、「主、ここにいます」、「イエス様がここにいて下さいますから、大丈夫です」と。事態が思ったようではない。願わないような事柄であろうとも、「神ここにいます」、「神様、あなたがすべてのものを統べ治めたもうお方。無から有を生み出し、死人を生かし、全能の力をもって、私たちを今もこうやって支えて下さる」と信じる。これが見えないものに目を注ぐことです。

私は、この年、この日に至るまで、よくぞ生かされたものだと思います。自分の努力、自分の熱心なわざで生きることができたのかと言われると、到底、できません。もうここで駄目かと思ったようなことは、皆さんも、一度や二度ならず、あるに違いない。戦中戦後、必ずしもすべての生れたものがつつがなく、健康で、人生を全うすることはまずありえない。その人生の一コマ一コマを造り出して下さる神様がいますことを知るならば、私たちは焦ることはいらないのです。神様に信頼して、それがどんな事態であろうと、事柄であろうと、そこに見えないお方を見つつ、神様のなさるわざを待ち望むことができるからです。最後に一つ読んでおきましょう。

「使徒行伝」7 章 54～60 節を朗読。

これはステパノという使徒の殉教の記事です。彼は聖霊に満たされ、大胆にイスラエルの人々に悔い改めを勧め、キリストを信じよと迫ったのです。7 章 1 節以下にステパノが語ったメッセージ、イスラエルの民の歴史を紐解きながら、神様がどんなご愛と恵みをもってここまで至ったか、そして、神様の恵みを受ける

ことこそ幸いな道であると語り続けています。ところが、当時のユダヤ人たちは大変憤るのです。自分たちのこれまでの信仰の在り方を否定されたように思ったのです。その結果、ステパノを激しく憎みます。先程読みました54節に「**人々はこれを聞いて、心の底から激しく怒り**」と、怒りの極限です。激しい怒りに満たされて、「ステパノにむかって、歯ぎしりをした」。その怒りたるや、とてつもない怒りです。おそらくそれを見るだけで恐れをなすに違いない。命を縮めるに違いない。しかし、ステパノはどうしたでしょうか。55節に「**彼は聖霊に満たされて、天を見つめていると、神の栄光が現れ、イエスが神の右に立っておられるのが見えた**」。聖霊に満たされ、神様の力にステパノは満たされる。これが私たちの力です。私たちにも今、神様はこの力を与えて下さる。それは神様のなさるわざに自分をゆだねていくことができる力です。彼はこの時、祈っていました。周囲の者たちが怒り狂っているその真っ只中で、彼は神様だけに心を向けていた。その時、彼は神の栄光が現れて、イエス様が神の右におられる。父なる神、子なるキリストが、そこにおられる姿を見るのです。そして大声でその事を叫びます。56節に、「**人の子が神の右に立っておいでになるのが見える**」。ここで彼の見ているのは何なのでしょうか。目の前の、怒り狂って自分を攻め、石で撃ち殺そうとして、激しく攻めてくる人が見えます。その見えるものにだけ目をとめていたら、もうとっくの昔に気絶しています。茫然自失、縮こまって、言葉も出ないに違いない。しかし、彼が見ていたのは、怒り狂った群衆の姿ではない。彼は見えるもののもう一つ先に、よみがえって下さったイエス様を見ている。主が父なる神様と共にいらっしゃる。その神様を見ていた時、彼の心は恐れがない。56節に「**そこで彼は『ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える』。**」そう言って、彼は喜びに輝いている。その時、とんでもない声を聞いたとばかりに、ユダヤ人たちは殺到して、58 節、「**彼を市外に引き出して、石で打った**」。石で打って、殺してしまう。59節、「**こうして、彼らがステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけて言った**」。神様はステパノが祈り続けている間、彼の魂をしっかりと支えて下さった。そんな神様がいらっしゃるのに、どうしてステパノは死ななければいけないのか。ステパノはこんなに立派に、神様を慕って、しっかりと立っているのに、どうして神様は彼を撃ち殺すような事をしてしまったのか。そういう疑問を言われる方がいますが、理由はわかりません。ただはっきりしているのは、何が私たちの真の力であるのか、何を私たちが見ていくべきであるかを、神様はステパノを用いて、その死を通して、ここに語っておられるのです。これははっきりしています。その他にも、神様のご計画して下さったみこころがあるに違いありませんが、それは、今はわかりません。しかし、はっきりしているのは、どんな時にでも、一番の力は、私たちが神様を見上げていくこと、神様を信じることから受ける力によるしかないのだということです。ステパノに

石を投げつけてくる。ステパノはその怒り狂った、鬼のような群衆に目をとめていたのではない。それだけを見ていたら、もうとっくに消えてしまったでしょう。しかし、彼はそうではなかった。今、もう一度、私たちは「**見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ**」。

初めに戻りましょう。「コリント人への第二の手紙」4 章 18 節、「**わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである**」。この見えない方に、私たちはたえず目を注ぎ、心の目を開いて、しっかりとよみがえったイエス様を常に見ていきたい。ここにも主がおられます。この問題の中にも、今ここに主が立っていて下さる。私にとって、嫌な事、辛い事、苦しい事があるかもしれない。しかし、そこにも主は私たちを見放しているのではない。私たちが問題ばかりに目をとめて、苦しいあの事この事、あの人ばかりを見るから、苦しいのです。悲しいのです。怒りが湧いてくるのです。そうではなく、その人の背後に、隠れた事を見ておられる、隠れたところに神様がいますことを、しっかり心に信じて、その目の前の問題、事柄に勝利していきたいと思います。「**わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ**」。

ご一緒にお祈りを致しましょう。